



基調講演 ロータリーの未来とそのあり方

ロータリー財団トラスティー RI元理事 千 宗室

キング会長が「Mankind is our business」という言葉で、「私たちロータリアンは世界人類のために尽くさなければいけない」ということをおっしゃいました。その後、今年度7月から会長におなりになるピチャイ会長代理が「Sow the Seeds of Love」、慈愛の種を播きましょうということをおっしゃいました。このつながりを考えてみますと、まさにロータリーの未来というのが示されているように私は思うのです。

私たち人間がこうして生かされている、ということに感謝すること。ですから、人類のために何かできることをしなければならぬ。これはディッケンズのクリスマス・キャロルを通してキング会長が示されたターゲットでもございます。スクルージの前に出てきた亡霊の、自分は何も生前にすることができなかった、何か人類のためにできることがあったらやりたい、という思いから出てきた言葉が、「mankind is our business」なのです。そういうことから考えると、私たちのささやかな行為でも人類に尽くせるのであるならば、大事なことだと私は思うのです。

ロータリーという団体がどういう組織であるかということについては、もう我々が入会するときに先輩諸兄にいろいろ導かれ、インフォメーションを受けたわけでございます。そして、ひとりひとりがロータリーはこういうものだという気持ちで、毎回の例会に出席しております。ロータリーというのは、非常に年齢層が広いわけですが、また、職業の範囲も同様に広い。私自身の経験から申しますと、自分の父が京都ロータリークラブの古いメンバーでもございましたから、子供のときからロータリーがどういうものかということは、家族会などを通じて、また父が機嫌のいいときはロータリーの歌などを唄っておりましたので近いものであり、奉仕の理想という言葉も子供心に心の中に残るような感じがしていたわけですが、そういう次第で、

いつか自分もロータリーというところに入らなければならぬのかなあ、と臆気ながらに思ったこともありました。しかし、戦争によってそういう思いはどっかへいってしまいました。戦後、日本のロータリーが世界のロータリーの仲間入りをし、再びロータリーが脚光を浴びたわけでございます。

昭和28年に京都に青年会議所ができて、私は設立の頃からメンバーとして活動しておりました。昭和29年に、京都ロータリークラブが初めてアディショナルクラブをつくるということになりました。南の方を中心として計画がすすみ、こうしてできたのが、きょうこのホストクラブを務めていただいております京都南ロータリークラブでございます。私も、当時の京都クラブの会長さんや諸先輩方、あるいは私の父から、「京都南ロータリークラブには若い人たちが半分ぐらい入会するから、ぜひチャーターメンバーで入ってほしい」という要請を受けました。私は青年会議所の理事長を務めておりましたが、おすすめていただいたことから昭和29年に入会いたしました。

随分昔の話になってしまいますが、私自身は自分の父からロータリーというものを身近に知らされ、また青年会議所を通じて地域社会に奉仕し、友情を深め、互いに信頼感をもち、人と人のつながりを大切にしていまいりました。自分の家が茶家でございますから、いつも父より「お人は宝だよ、どんなお方でもお人に接していろんなことを自分が学ぶ姿勢を持たなければいけない、そうすると自分がそれだけのものを自分の身に付けさせていただくことができる。だから、お人を大事にするということが、お茶の世界において一番大切なことだ」と教えられてきました。

先ほど西村二郎ガバナーが、「癒し」という言葉を使われました。昔のお医者様は「癒し」を大切にされてきました。これは精神的にも慰め、それを大切にすると

ことによって病氣と闘い、病氣を克服していくひとつの力として指導、診療されていたように思っております。ですから、癒しの心はお医者様が使われる言葉だと思っております。しかしながら、それを自分の職業を通じて考えてみますと、一碗のお茶を差別・差別なくどなたにも真心をもって差し上げることができるといふ思いやりの心こそ、癒しの心に通じるのではないかと。これが、世界に対しても大事なひとつの実践要項ではないかと思えます。

私は、父によって「お人を大切に」という思想を教えられ、人間がお互いに差別、差別することなく、いつでも一体感を持つことが大切であるという気持ちを養われまして、それを今もなお大事にしています。

今まで会長の方のターゲットを見ますといろいろありますが、ピチャイ会長代理がお示しになった来年からの「Sow the Seeds of Love」のように、loveを仏教的に使われたのはピチャイ会長代理が初めてだと思います。

実は今年1月末からアナハイムへまいりまして、初めてピチャイ会長代理の次年度の方針とテーマをお聞きいたしまして、これは素晴らしいなと思いました。やはり、タイという国は古いお国であり、立憲君主国で、日本と同じように王室を持った国家でもあります。その国家の中でピチャイ会長代理は、長い間政治の世界にいらっしゃった。外務大臣副総理までお務めになったタイ国においてはトップの方であり、国連にも代表として出られ今日のタイ国の確固たる基礎をお作りになった方でもあるわけですが。私は、随分昔にお目にかかったときから、このお人柄に接しまして、なんと素晴らしいと穏やかな方だろう、しかも信念がはっきりする。その信念こそお人を大切にされることであると、私は見出したわけですが。

皆様方がタイ国にお行きになると、どなたも合掌を

いたします。日本でも仏教国でありますから合掌される方が多いのですが、でも、日本という国は非常に面白い国でございます。多くの方が仏教を信仰しておられるようでも、この国は昔から神道の盛んな国でもあります。そのために、お寺も多ければ、神社も非常に多い。何かにつけて、社寺にお参りする。例えば、子供が成長してまいりますと、七五三というように年齢ごとに、神社にお参りに行って子供の成長をお願いし、お祝いします。

たとえば、私のような古い家では、(自分自身のときのことは覚えていないのですが)せがれや孫たちに、昔通りのことをやって参りました。5歳になりますと着袴の儀と申しまして、男の子に袴をつけさせて碁盤に立たせます。鴨川に大変黒いまぐろ石というのがありますが(この頃は造園によく使われています)、碁盤にはこれを置きましてその上に檜扇を右手に持った男の子が立つのです。そして、「えいっ」というかけ声と同時に飛び降ります。飛び降りるといっても、碁盤の高さですからそんなに危ないことはございません。でも、なにしろ5歳ですからひっくり返ったりすると危のうございますので、親たちが介添えもいたします。そういうような風習があります。これによって、あなたは男性であり、これから家業を継いでいくにしても自分の身をもっていろんなことを体験していかなければいけない、というひとつの修業の始まりになるわけですが。いわゆる男として、世の中にこれから出ていくための第一歩を示すということですが。

また、嵐山に俗に虚空蔵さんと呼ばれるお寺(法輪寺)がございまして、大変な知恵をお持ちです。男も女も13歳になりますと、渡月橋を渡ってお参りをしてお知恵をもらってくるんですね。これを十三参りといいます。ちょうど4月です。13歳というのは、今では数えだとか満だとかいいますけれど、昔は皆数えでやっ

たわけです。小学校を終えて、これから中学校や女学校へ入って、人間として成長していく非常に大事な出発点です。ただし、渡月橋を渡って帰ってくる時には絶対に振り向いてはけない、振り向いたら全部知恵をかえしてしまうというのです。だから、絶対に振り向かないで橋を渡りきらなければいけない、といわれています。

こういうようないんなしきたりが神仏を中心にして日本という国にあるわけです。外国の方がよく日本に来てびっくりされるのは、いったい日本の国というのは神道の国だと思っていたら、仏教の方々が非常に多い。しかも面白いことに、年末に日本にいれば、日本人の神仏に対するフレキシブルな態度がわかる、というわけです。神仏を信じている日本人が、ジングルベルの音と共にクリスチャンになってしまう。そして、それから一週間もしない内に除夜の鐘を聞き、百八つの煩悩を祓う。そしてお寺の鐘の音と共に自分の身を清らかにして、元旦の朝には神社に走って行って拝む。12月のあのあわただしい時期にキリスト教徒になってみたり、仏教徒になってみたり、それから神道になってみたり。まったく日本人というのは、器用な民族ですなあ、とよくいわれます。

ところで、器用といえば、ピチャイ会長代理はお箸を上手にお使いになる。これは、やはりタイ国も箸の文化の国だからで、中国もそうです。このアジアの中でも多くの国が箸を使っています。この箸というものは、いうならば武器にはならない。平和なものです。フォーク、ナイフはすぐに武器になるわけです。ですから、あのテロ事件以来、飛行機に乗りますとフォークは普通のフォークですが、ナイフは全部折れそうなプラスチックのナイフしかできません。それだけ、気遣いをするほど、フォークやナイフはすぐに武器になる。フォークでも武器になるんです。ところが、箸は絶対

に武器にならない。

箸というのは、日常何気なく使っているけれど、これは本当の神の擲り代であるということです。神の擲り代ということは、神様にご神饌を差し上げるときに必ず箸をお供えになる。そして、お使いになったご神饌のお下がりをお願いして、自分たちがそのお箸でものを頂戴するんです。そういうことは、伊勢の皇大神宮にちゃんと風習として残っています。

また、昔から正月には門松を立てたり、建築をする時でも笹竹に縄を張って縄張りを示します。真ん中にお櫛を置くということも、神様ここが我々の縄張りでございます、どうぞここにお降りください、ということです。門松も、ここにおいでいただくためのひとつの目印でございます。そういうことで、我々は注連縄を張ったり、門松を立てたりするわけです。神様をご覧になって降りて来ていただくということによって、神も仏もすべて一体感になるということが、日本古来の風習なのです。

そういう日本人でありながら、この頃ではその子どもがあまり認識されていません。それがために、社会において、世代の断絶のような現象が起こってきているように思います。私どもはロータリアンとしても、またライオンズのメンバーの方々にも一番常識ある組織の中にいる人間として、日本の将来を考えるために、我々自体がもっともっと古来行われてきたいろいろなしきたりを、単にめんどくさいということで全部やめてしまうのではなく、もっと大切にしなければならぬと思うのです。そして、それによって日本という国のひとつの特色が世界に示されるんだということをもう一度再認識する必要があるかと、最近しみじみと思います。

私は国際ロータリーの本部があるエバンストンにまわりますと、各国の方々に会ってお話をするのですが、

休憩時にいろんな方が私に質問をします。なかでも、日本という国は、戦後に立ち直って大変素晴らしい経済復興を遂げ、今の日本はバブルというような時期があったにもかかわらず、ロータリアンは非常に健全に地域社会、世界社会奉仕のために努力している。このパワーは、いったいどういうところにあるんだ、ということをよく聞かれます。

先程から長々と箸の文化やいろいろなことを申し上げてきましたが、そのパワーというのは、やはり日本人の長い歴史の中にあると思うのです。神仏を中心に家族を構成しその家々の中に伝わってきているひとつの家風、好き嫌いに関わらず家の風というもの人間生活というものの幅広いあり方を示している。そして、それが知らず知らずの内に親から子、子から孫に授けられているのです。さっきの着袴の儀にしましても、十三参りなどにいたしましても、そういうようなことを通じて、今は核家族のようになっていますが、家族みんなが結集して家の良さというものを守り育てていくというところに、次の世代に対する望みが生まれてくるのです。知らず知らずの間にこうしたことが培われてきているということが、日本人に古来授けられてきた知恵であり、知識であるということをお知らせしたいと思います。

それでは、ロータリーの未来というものはどうなんだ、ということになります。日本では日本流のロータリーというものがあり方が、この3、40年の間に随分討議されてきました。我々の家に家風というものが育まれてきたと同様に、日本には日本のロータリーの風習というものがバスターガバナーの方々の指導によって形づくられてきています。そして、その中から日本人の誠実さ、慈愛、忍耐、寛容、ピチャイ会長代理がお示しになったLOVEを育てていく。LOVEというのは単なる愛というのではなく、いわゆる世界人類が平等であり、

その中で人間性をお互いに尊重するというものです。つまり、みんなが同じ立場で同じレベルで愛し合っていくということがパワーになる、原動力になる。私はそういうように、解釈をしているんですけど、これは間違いではないでしょう。

したがって、エバンストンでコーヒブレイクのときに日本人の原動力はどういうものかときかれ、次のピチャイ会長代理のあのテーマを見てください、と私は答えました。日本はピチャイ会長代理と同じく仏教国ですけど、神道の国でもある。お互いがそうした中において共に一体感を持つということで日本の家の風をつくっている。その風の中から、いうにいけないパワーが生まれてくる。これが、日本人のあらゆるものに対する哲学であり、思想であるということをお示ししました。

そして、エバンストンには小さな講堂があるのですが、そこで私はお茶のデモンストレーションをしました。私は、自分たちの文化というものを伝えることが大切だと思うのです。

いうまでもなく、世界で一番常識のある人は、ロータリアンであり、ライオンズのメンバーであり、ソロブチミストのメンバーであると思うのです。それはどうしてかという、これらの組織に入っていってしゃる方は、人間として豊かな方、お互いに尊敬できる人たちであると思うからです。それだけのレベルを持っていらっしゃる。自己意識というものをもちながら、研鑽努力している人たちであるから裏切りがありません。そういう人たちが共に手を取り合ったならば、世界に対する非常に大きなアピールができるのではなからうかと思えます。

そういう意味からいって、ロータリーの未来というものは捨てたものではない。捨てたものではない、という大変失礼な言葉を使うのは、日本人だけでなく

いろんな方がロータリーは終末に近いんじゃないか、近い未来にロータリーはなくなってしまうんじゃないか、というようなことを質問されるからです（これは、ロータリアンでも口にされます）。ロータリーを半分知って、ロータリーなんか入らない方がいいだろう、あるいはライオンズなんかに入らない方がいいだろう、というような人たちが、まだ日本中にごまんとおられるわけです。

当然ですが、組織に入って「We serve | serve」[he profits most who serves best]、おこがましいですけれど「世に尽くすものこそ本当によき報酬をもらう」という、こんな報酬を目当てにサーブをするということは絶対ないわけです。でも、大半のロータリーを知らない方は、ロータリーやライオンズに入っていれば、何か見返りがあるのではないですかという。そういう見返りを求めて、仮にロータリアンになったとしても真のロータリアンにはなれないわけです。「無為無我の心」を持って奉仕をしなければならない。それで尽くすということこそ、ロータリーという組織の未来というものにつながっていくんだと思います。

ロータリーの今日も、未来も、それを健全なものにしていくのは、皆さん一人ひとりなんです。ピチャイ会長代理の「未来のために、いま慈愛の種を播きましよう」という提言はいいですね。未来のためにその種を一粒一粒汗水垂らして、我々が播かなければいけないと思うのです。播くことによって種が育ち、またいろいろな虫を、あるいは草木を排除する。そういうところにgrass roots 草の根がずつとはびこっていく。その立派な草の根がはびこって行ってこそ、ポール・ハリスのつくられたロータリーの精神が、次の100年に向かって大きく羽ばたいていくのではなからうか、と思うわけです。

私たち一人ひとりのメンバーが、もう少しロータ

リーの根本的な思想、精神、哲学をお互いに勉強して、ただラジカルな点だけのロータリーではなく、アクションできるロータリーが生まれて行ってこそ、初めて未来につながる足場というもの、いわゆるgrass rootsというものが大きくなるとはびこっていくものであると私は信じているのでございます。

釈尊に八正道という教えがござりますが、これはロータリーのFour Way Testによく当てはまるものだと思います。ちゃんと釈尊はそういうことをお教えになっています。四つのテストは、真実、公平、友情、奉仕というような具体的な4つのテーマでありますけれど、八正道という八つの正しい道、教えに呼応しています。

簡単に申しますと、まず第一番に正見、正しく見る。何ごととも正しく見るという気持を持たなければなりません。これはものを素直に見なさいという、教えなんです。先入観でものを見ない。ロータリーでも、何でもそうです。ガバナーになられましたら、ガバナー教育というものがあります。そこで従来のロータリーに対する考えや思いというものを全部洗い出して、新しいロータリー会員にロータリー観というものを与えられるわけです。そこから、ロータリーに対する正しい見方が生まれる。

第二番目は正思、正しく思う。思惟するということは思索すると、同じ意味でござります。本当に自分の心が自分でわかっているか。それが分かっている人は希です。ですから、私たちはいろんなロータリーの会合にでて、自分の存在価値というものをそこで知ることが大事だということです。自分なりの哲学を持つこと、デカルトがいました「我考える故に、我ここにあり」というのがありますが、素晴らしい教えです。

第三番目は正語、正しい語。よく人間には言い間違いなど、いろんなことがござります。それをすぐに訂正する素直な気持ちが必要です。正しい言葉を使いま

しょう。正しい言葉を使うことによって、相手に対してその言葉が通じていくということが、大事だと。まず己の言葉に責任を持つということが大事。

第四番目は正業、正しい行い。本当にロータリーの教えにあるvocation天から授けられた自分の仕事、任務が一人ひとりにあるわけです。そういう天から与えられた仕事に感謝することによって、自分の仕事に誇りを持ち、またそれを通じて相手のお仕事を理解し、共に一体感を持って助け合うことができるということです。

第五番目は正命、正しい命。これは、いわゆる自分という立場を知れということです。人間というのは、本当にうぬぼれや思い違いが随分あるわけです。自分自身で反省する、省みるということが大切です。お茶をなんで廻して飲むのか。廻さなくてもいいのですが、廻していただくということは、正面を避けていただきますということなのです。それだけのことなのです。絵の描いてあるところから飲んではいけないというわけではありません。自分と向かい合った正面を避けるということで、自分を省みることができる。自分を謙虚にするということが非常に大切だということです。たった一碗のお茶でもお先にいかがですか、と進め合うという気持が思いやりであり、進め合う心を持って共に一体感があるということが出来るわけです。

第六番目は正精進、正しい精進。一生懸命努力すること。もうできないとか、ダメだとか、そうではなくて本当に自分が努力する。一生懸命努力しましょう。

第七番目は正念、正しく念じる。念ずるという心がどういうものであるかということ、今という字の下に心がある。これが念じるなんです。今の心です。今の心というものを土台にして、過去未来がある。それを大事に持つということが非常に大切です。

最後に正定、正しく定まる。定まるというのは、不動の信念。落ち着きですね。経済不況などいろんな嫌

な事件などが起こっていやですね、仕事がうまくいきませんね。でもじたばたせずに、慌てずに、今のこういう時代だからこそ、一碗のお茶を点て人にも与え、じっくりといただいてみてください。一碗のお茶を両手でいただいてこそ、明日への心が生まれてくるんだと思うんですよ。皆さん方がそういう気持でお互いに安定した気持を持つことが大切なのです。ロータリアンがぐらぐらしたらダメ、未来も何もありません。どうぞ、ひとつここで腹掬えをして、お互いに信頼しあって行こうではありませんか。

7月からは、ピチャイさんという我々のアジアの中から会長がでられる。素晴らしい会長です。デブリンさんからキングさん、そしてまたピチャイ・ラタクル会長へと続いていくこの路線。私どもが種播きをしてロータリーの未来のために花を咲かせるように努力していこうではありませんか。それが私たちに与えられた大きな任務なのです。